

メディアセンターフレンズ活動報告

とけし
渡慶次りさ

(政策・メディア研究科修士課程1年)

きむら ゆうさく
木村 優作

(環境情報学部4年)

きん かひん
金 華斌

(環境情報学部3年)

ながさか いさお
長坂 功

(湘南藤沢メディアセンター)

1 メディアセンターフレンズとは

大学図書館においてラーニング・コモンズにみられるような学生同士の立場や学生の視点を重視し、サービスを見直す動きがみられる¹⁾。これまでも学生目線でサービスを改善する動きは利用者アンケート調査などで進められてきたが、さらに踏み込んで学生主体でメディアセンターのあり方を考え、企画提案を自律的に行ってもらおうという試みがメディアセンターフレンズ(以下、フレンズ)の活動である。

2011年9月にスタートした活動は当初より3名の湘南藤沢キャンパス(以下、SFC)生が参加し、現在では数々の企画活動を行うまでに至っている。ここでは3名の学生とともにフレンズの活動概要を紹介し、メディアセンターという場において学生がどのような空間を期待しているのか、これまでの活動によって得られたものは何かについて振り返り、今後の課題と展望について述べておきたい。

2 活動概要

3名の学生によって構成されているフレンズは公募により選ばれており、メディアセンターのあり方について意見を出したい、自分で企画を行ってみたいという学生を採用した。スタート当時は学生の声を業務に反映したいという職員側の思いがあり、特にマルチメディア・マルチリンガル・スペース(以下、MMLS)について外国語学習空間としての本来のあり方を取り戻すための具体的な方策を考えるにあたっては、学生の提案、若さ、実行力への期待があった。

メディアセンターの学生アルバイトとして登録してもらい、定例ミーティングや企画準備の実作業時

間を勤務時間とした。フレンズの直接的なサポート担当としては2名の職員がつき、企画提案の審議には湘南藤沢メディアセンター所長と事務長にミーティングに加わってもらい、具体的な活動の承認を得ることになった。

最初の半年間は各フレンズの提案について、スタッフと隔週程度で個別に打ち合わせをしながら具体化していき企画提案書を準備してもらった。その後、外国語担当の教員や一般学生、スタッフの前で公開形式のプレゼンテーションを行った。このプレゼンテーションはUstreamでも配信しており、収録ビデオとして他の活動とあわせてアーカイブされている²⁾。

その後、湘南藤沢メディアセンター所長の意見もあり、フレンズの1名が提案した研究会展示を3名で協力しながら行うことになった。これは研究会の成果物やプロジェクト紹介、学生の研究発表や公開授業などを一定期間、MMLSをはじめとしたメディアセンターの施設内でやろう、というものである。研究会展示の準備や研究会とのパイプ役を担うのがフレンズであり、結果的に運営側としてメディアセンター側の視点も加えて企画展示をアレンジする、コーディネーターとしての働きもしているといえる。

あわせて研究会展示からスピアウトしたSFC生向けの外国語学習法の講演会、外国語検定試験の対策本や学習参考書をレビュー付きで紹介する常設展示なども企画運営している(表1)。

3 フレンズ活動

(1) MMLSの実態と留学生交流について(渡慶次)

フレンズの活動として、MMLSと留学生交流につ

表 1. フレンズ活動記録

	タイトル
2012年 10月	第1回 研究会展示「君はSFCを知っているか？」 古石篤子研究会
2012年 12月	英語学習法講演会「英語うまくなりませんか？」 ※開催場所は AV ホール
2013年 1月	第2回 研究会展示「usual unusual」 寛康明研究会
2013年 5月	第3回 研究会展示「Waragai Café」 藁谷郁美研究会
2013年 6月	常設展示「外国語検定対策本、参考図書特集」

いての学生の意識を知るため、2011年11月29日に、メディアセンターでアンケート調査を行った(アンケート配布枚数：180枚、アンケート回収枚数：71枚)。主な結果を図1に示す。

「MMLSという部屋を知っていますか？」という質問に対して、はいと答えたのは13人、いいえと答えたのは58人だった。また、「MMLSを利用したことがありますか？」に対しては、はい：8人、いいえ：63人という結果になった。

一方、「留学生と友達になりたいですか？(留学生の場合：日本人学生と友達になりたいですか?)」という質問には、はい：62人、いいえ：8人となり、「学んだ外国語を、実際に使ってみたいですか？」については、はい：69人、いいえ：2人、「学んだ外国語を、学生に教えてみたいですか？」に対しては、はい：22人、いいえ：49人という結果になった。

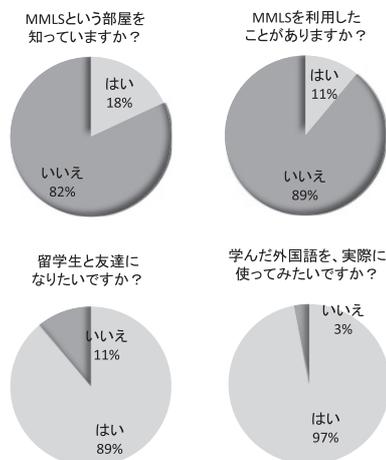


図 1. アンケート結果

このことから、MMLSの利用者が少なく、その存在さえも知らない学生が多いことがわかった。その一方で、留学生と交流したい、学んだ外国語を生かしたいと考える学生も多くいることが分かった。

現状からMMLSに足りないのは人とのコミュニケーションであり、ちょっとした仕掛けづくりにより、MMLSを変えられるのではないかと感じた。

SFCでは日本語を含めると11言語を学ぶことができ、外国語や外国の文化に関心のある学生も多い。海外留学に行く学生もいる一方で、外国からの留学生、世界中からの帰国生も多数在籍している。国際交流という外に目を向けがちではあるが、SFCではキャンパス内で「身近な国際交流」ができると考えており、そのためにMMLSの再生が役立つのではないかと発想した。現状のMMLSに足りないのは人と人とのコミュニケーションであり、ちょっとした仕掛けづくりにより、MMLSの何かを変えられるのではないかと感じた。そこでMMLSのレイアウトをガラリと変え、イメージを新たにすることで雰囲気良くなり、留学生と日本人学生の半学半教の場として機能する「MMLS改革」が私の願いである。

(2) 研究会展示 “Media Center Jack” (木村)

MMLSでの研究会展示をPRする標語 “Media Center Jack(以下MCJ)”は、JACKという刺激的な用語とあいまって、研究会による展示作品をとおしてメディアセンターでコミュニケーションを図ろうという取り組みである。(図2)

研究会による展示を提案したのは、SFCではオープン・リサーチ・フォーラムや各々の研究会独自の発表の場所は存在するものの、それらの外部に向けられた展示や発表ばかりで、内部での学生同士の交流の機会はあまりなかったためである。

メディアセンターという場を使えば、SFC生が自然に交流することを期待でき、研究会展示なら展示品や研究成果物の完成度も高く、お互いがお互いを知っていくという機会の継続性も備わっていると考えた。

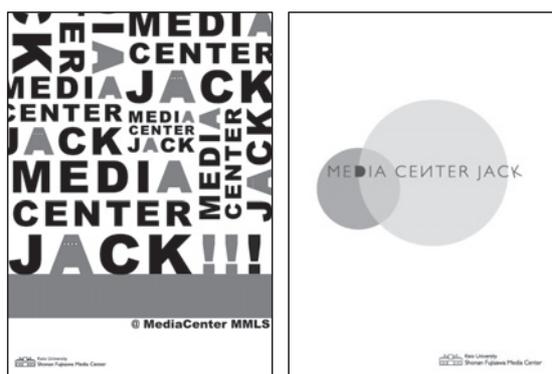


図 2. MCJ ポスター

なお、第2回の研究会展示からはMCJの広報活動はポスターだけでなく、図3のような専用のfacebookページを作成して、活動紹介を呼びかけることにした³⁾。facebookページはその“いいね”の数によって投稿が届く人数が変わるが、第2回の研究会終了時点で80程度だった“いいね”数が第3回の薬谷研究会終了時は170以上になった。つまり、今後の投稿は170人以上の人に記事を届ける事が可能になったこととなり、継続的な研究会展示をすすめる上で力強い告知ツールとなった。

MCJという名称を持つフレンズの運営する研究会展示は、秋学期に引き続き第4回が予定されている。来訪者数も徐々に増加しており、実際のコミュニケーションの場づくりという面において軌道に乗せる事が出来たといえる。

今後のフレンズ活動に向けては研究会とは性質の異なる個人の研究や制作物に焦点を当てた展示会の実施を提案中である。場所もMMLSとは異なったメディアセンター内施設での実施を考えている。

研究成果物としての図書や論文、発表プレゼンテーション、映像やデザインといったオブジェクトとしてのメディアだけでなく、人そのものがメディアとして他の人の創造性を誘発したり、人と人、人と展示物、あるいは展示作品同士のコラボレーションを発生させる場としてメディアセンターが機能していくことを目指していきたい。



図 3. MCJ フェイスブックページ

(3) 留学生とSFC、メディアセンター（金）

私はSFCに遠い夢を持って入学したが、留学生たちは元気がないように見えた。国ごとに孤立していて、同じ国籍を持った先輩なしでは履修テクニックや学内活動などを知るきっかけは中々なかった。授業に一人で出ていて、授業が終わったら直ちにバス停へ向かう姿が目に入った。あるいは、私のように留学生とは距離を置き、自分なりにSFCの大学生活に取り組んでいる留学生も目に入り、自問する日々だった。

異なる国の留学生同士での交流は日本語教室に限られ、個別の出会いにとどまっているように私には感じた。メディアセンターでも留学生とどのようにコネクションするかは一つの課題でもあった。私にとってはそれがフレンズの始まりだった。留学生の現状を良い方向へと変えることができれば幸いだという気持ちでメディアセンターフレンズに参加することにした。

当初の課題はどのように留学生たちをこの場に引きつけるかということであった。メディアセンターの担当職員との打ち合わせで考えながら、公開最終発表に向けて企画案の準備をしていた。メディアセンター側では是非とも学生の声を聞きたいという意思を持っており、フレンズの提案は後に実現するものとなった。(図4)

当時の発表で取り上げたのは、質の高い外国語勉強を促すこと、カフェのような気軽な交流ができる場にする、交流イベントを行うことなどである。



図4. 研究会展示の様子

なお、これまで開催された三つの研究会展示の他に、二つの展示企画を提案したものの、形とすることができなかった。一回目は対象研究会との調整がつかなかったこと、二回目は私の提案した研究会が自主ゼミであったため、メディアセンター側との意見分岐があったことが原因である。

今後の活動として、各言語セクションのSAが共同して外国語の学習相談会をMMLSにおいて推進する企画を提案中である。実現すれば、従来は教室移動をとまっていた外国語の学習相談が、一か所で相談を受けられる。他の外国語学習の情報入手や比較も容易となりMMLSが気軽なコミュニケーションの場として機能することが期待できる。

このようなコミュニケーションの場の創出には複数の観点からのアプローチも必要である。何の目的でフレンズに参加したのかを意識しながら、いずれはメディアセンターが国際交流の場として機能していくことが大きな目標である。(図5)



図5. 公開の遠隔会議授業

4 成果と課題

フレンズの活動によりMMLSが新しい交流の場

として注目されるようになり、いくつかの研究会や外国語セクションから展示会を実施するにはどうしたらよいのか、といった問い合わせも少しずつ入るようになってきた。その意味で継続性には問題がなかったといえる。また、SFCの研究会はオープン・リサーチ・フォーラム等の場で成果発表をしているケースが多く、展示内容の面でも不安はない。来訪者数にはばらつきがあったが、これも広報次第ということがわかった。

一方で各研究会とフレンズがやりたいようにやってしまったという反省もある。今後は研究会の伝えたいことだけでなく、来訪者として期待するSFC生のニーズ把握を十分に行う必要がある。また、展示期間直前まで、展示作品の目録がわからないこともあり、結局展示できないままの作品もあった。そのため広報活動も後追いになってしまう傾向があり改善が望まれる。

メディアセンターと研究会との調整を担うコーディネーターとしてのフレンズの負担は大きいもので、それぞれの主張の矢面に立たされて窮する一幕もあり、責任感の強いメンバー揃いだけにサポート担当職員として心配もある。今後はフレンズや研究会に企画提案を丸投げにするのではなく、適宜メディアセンターのスタッフも提案段階からオブザーバとして参画する方向である。

5 おわりに

フレンズの活動も2年が経過し、3名の学生もそれぞれ成長した。新しい試みであるがゆえ、どこまで完成度を高めるべきか、力の入れ具合がわからずに雲をつかむ思いであった。予定していた研究会展示が実現できなかった失敗もあり、フレンズと悔しさを分け合った日もあった。

それでも続けることでわかったことがある。新しく何かを始める際には学生、教員、職員がそれぞれお互いを知り、認め合う必要があるという、当たり前とも思えるシンプルなことだ。現状は変えることができる。一つの場で、異なる立場を理解しながら何かをつくりあげようとするこの試みは、お互いの調整の連続であるが、不器用で手間も労力もかかるフレンズ活動を今後もサポートできれば幸甚である。

〈特集〉 教員・学生との結び付き：メディアセンターの新たな取り組み

注・参考文献

- 1) 加藤信哉, 小山憲司編訳. ラーニング・コモンズ 大学図書館の新しいかたち. 東京, 勁草書房, 2012, p. 203-269.
- 2) メディアセンターフレンズ. <http://www.sfc.lib.keio.ac.jp/about/friends.html>. (参照 2013-07-29).
- 3) Media Center Jack. <https://ja-jp.facebook.com/MediaCenterJack>. (accessed 2013-07-29).



第1回 古石研

第2回 筧研
研究会展示ポスター

第3回 藁谷研